

東京都慰霊堂・復興記念館の伝承と観光まちづくりの現状

丸 岡 泰

本稿の関心：東京都慰霊堂・復興記念館の伝承の含意

東京都墨田区の横網町公園に所在する東京都慰霊堂は、1923年の関東大震災と太平洋戦争末の1945年の東京大空襲の犠牲者を合祀する施設であり、同一敷地内の復興記念館は同震災と同戦争の資料館の性格を有する。本稿は観光まちづくりとの関連に注意しつつ、これらの施設の「伝承」の現代的含意を検討することを目的としている。

関東大震災後100余年、太平洋戦争後80年近く経た今日、このような検討を行う背景は、これら施設が東日本大震災後の遺構など訪問施設の先例だからである。2011年3月11日に発生した同大震災で東北地方太平洋岸等に多大な被害が及び、今日までに各地の震災遺構が整備された。一般財団法人3.11伝承ロード推進機構(今村文彦代表理事)がこれら遺構からの防災・減災の教訓普及活動を行っている。そのキーワードは「伝承」である。

通常、施設では、伝承の発信は施設設計者・管理者により、受信は日本人の一般的訪問者によってなされる。よって、本稿では多くの展示品の詳細な説明や専門的関心ではなく、一般的な訪問者の視点で展示の備える伝承内容とその受信、受け止め方に注目する。

このような視点から、とくに次の3つの論点を検討する。

第1の論点は、災害後設立された施設が発する伝承の内容である。一般的には、災害の悲惨さと防災の教訓を伝えることがこのような施設の目的と考えられる。ただし、その伝承の発信と受信の方法には時代の世情と災害の性質、その後の経緯等による差異がある。よって、設立後の長い時間を経た慰霊堂・復興記念館の現状は他の災害関連施設との比較の上で興味深い。

第2の論点は、施設を通じた伝承の行為と観光まちづくりとの関連の有無である。近年の観光とまちづくりとの接近により発生した観光まちづくり活動は2012年から墨田区両国でも実践されている。施設の伝承にこの活動が及ぼした影響の有無を検討する。

本稿の第3の論点は、関東大震災から100年を機にリニューアルされた復興記念館のアニメ動画における伝承の内容と、その観光まちづくりとの関連の検討である。

おわりに、これら論点からの知見をまとめる。

1 横網町公園の目標における伝承と現状

伝承は現在の都立横網町公園の目標の一つである。東京都建設局[2022]「横網公園マネジメント」は、向こう10年間を見据えた主な目標4つを掲げている。

目標1：地震災害時への対応のため、防災機能を強化・充実した都立公園

目標2：震災・戦災犠牲者の慰霊と惨禍の伝承の場としての都立公園

目標3：安全・快適な公園づくりを行う都立公園

目標4：独自の魅力づくりに取り組む都立公園

これら現在の目標について震災との関連で次のことが言える。

目標1の「防災」について、この公園は現在、東京都震災対策条例に基づく避難場所、墨田区地域防災計画による避難場所の指定を受けている。

目標2の「伝承」では、「被災者を追悼し平和を祈念する場として、また将来再びこのような災禍を繰り返さないための警鐘として、…本公園の歴史的意味を広く都民に伝承していく。」と記されている¹。

ただ、伝承の内容が活字化されているわけではない(東京都建設局公園緑地部公園課[2024.06.25])。ここは関東大震災時に約3万8千人の犠牲者を数えた場所だが、現在、避難場所化されているという事実は、火災時に集まると危険、という経験則がそのまま生きてはいないことを示している²。現在に至る変化の経緯は自明ではない³。為政者や行政が学ぶべき歴史の教訓はあるとしても、一般的訪問者がここで受信すべき伝承内容は明確ではない。

目標3の「安全・快適」は平常時の公園の当然の目標で、震災と直接の関連はない。

目標4の「魅力づくり」について、災害と戦災に由来する場の魅力というのは、災害・戦争犠牲者の追悼・慰霊と平和への祈念の環境にふさわしい魅力づくりという意味である。管理の方向性は慰霊との親和性の維持にある。

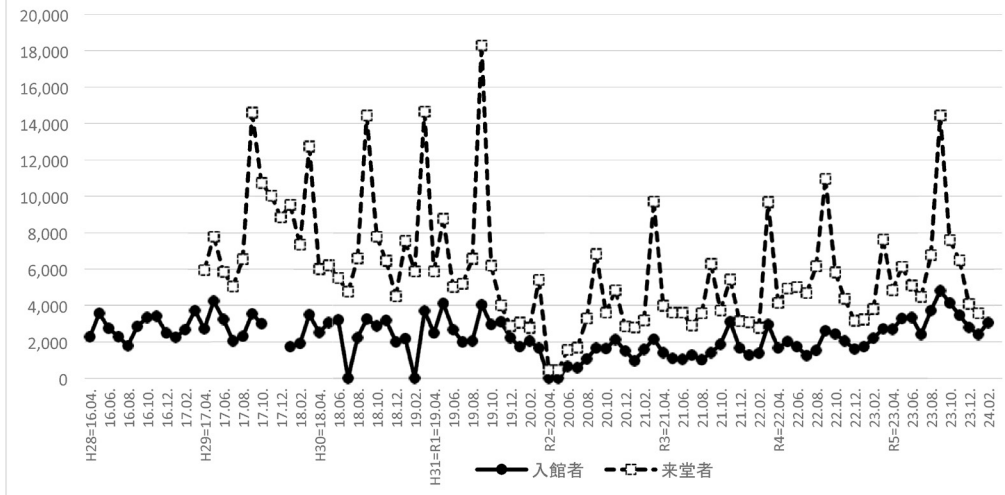
魅力について、現在、横網町公園は修学旅行利用がある(墨田区観光協会[2024.05.27])ため、教育的な価値を認められていると言える。が、今日の修学旅行の行先の多様化、生徒活動の活発化や情報技術の発達という社会環境変化を考慮すると、施設が古く展示品見学が主の同公園が今後多くの教育旅行の生徒にとって魅力的となる可能性は高くない。

これら4目標を掲げる現在の同公園の震災に関わる課題は、まず、一般的訪問者の訪問価値を高めるための発信とくに教訓内容の明確化だと考えられる。公園内施設とくに復興記念館の発信内容が多くの訪問者に伝わらない場合、その役割が十分果たせないためである。

もう一つの課題は伝承受信者の確保である。東京都建設局[2022]の推計によると、同公園の利用者数は平成29年度から令和3年度にかけて各年間18万人～27万人とさるが、人数の多くの部分は同公園の屋外の日本庭園の散歩利用や子供の遊び場としての利用である⁴。ともに無料施設の慰霊堂と復興記念館の来訪者数は近年、指定管理者の慰霊協会がカウンターでの計測を行っており(図)、そこから、i)すべての年・月で復興記念館入館者数を慰霊堂入館者数が上回る、ii)大法要の行われる9月と3月の来堂者数は他の月よりも大幅に高い、という特徴を指摘できる⁵。

これらの特徴から、現在の復興記念館の訪問価値は慰霊堂よりも低いと言わざるを得ない。伝承の内容明確化とともに、施設の訪問者数の確保・改善の検討が必要である。

図 復興記念館入館者・慰霊堂来堂者月別推移



出所：東京都慰霊協会[2024.03.13]より筆者作成。

2 慰霊堂・復興記念館の展示の伝承内容

次に、一般的な訪問者の視点で現在(2024年5月調査)の慰霊堂と復興記念館という横網町公園主要2施設の展示からうかがえる伝承内容を検討してみる。

まず、関東大震災の重要な伝承の役割を担ってきたのは徳永柳州の絵画である。8枚が慰霊堂、16枚が復興記念館に飾られている。震災とその後の模様を視覚的に伝えるこれらの絵画から悲惨さや恐怖、苦しみなどの感情は伝わる。ただ、絵画から現在に通じる何らかの言語化された教訓を読み取ることは難しい。

一方、復興記念館の1階の展示の主要部は災害遺物や写真と関東大震災後の復興にかかわるもの、2階の主要部は太平洋戦争に関わる展示である。1階の遺物や写真、資料、子供の作文等は悲惨さや恐怖を伝え、復興の資料は主に数字・地図・グラフなどの解説でまちの変化を伝える。復興資料は都市計画や防災に詳しい行政官・専門家への貴重な記録だが、感情惹起につながりにくく、一般的訪問者への防災の伝承とみることは難しい⁶。

後述の新設アニメ動画『閻魔裁判鯨髭拔』を除くと、多くの人への伝承を意図した防災関連の展示物として目に付くのは、同館2階のアニメ動画「紙芝居『関東大震災』」(10分34秒)である。震災後多くの被災者が逃げまどい、立ち尽くす中、バケツリレーでまちを守った神田和泉町・佐久間町の住民の協力奮闘が奇跡の美談として伝えられている。

館のウェブサイトにある解説の通り、この作品は「国策的な意図を持っている」⁷ことに注意が必要である。戦時体制下1941年の日本紙芝居協会原作のこの紙芝居は捨て身の消火活動を促す、奉仕奨励の意図で脚色された逸話である。現在の一般的訪問者にも有益な伝承の部分があるとしても、その意図を見逃してそのまま現在に適用すべきではない。

以上の通り、現在の一般的施設訪問者の目からすると、慰霊堂・復興記念館の関東大震災に関わる伝承の実質的内容は明確ではなく、そのまま現在に生かされる教訓ではない。

3 「両国観光まちづくり」の中での横網町公園

次に、本節では横網町公園と同公園を含むJR両国駅周辺での観光まちづくり活動との関連を検討する。

まず、「観光まちづくり」という語の定義は西村幸夫主査の研究会(2000年)の「地域が主体となって、自然、文化、歴史、産業など、地域のあらゆる資源を生かすことによって、交流を振興し、活力あふれるまちを実現するための活動」がある程度共有されている(西村 [2009];十代田[2010])。それまで別個に扱われてきた「観光」と「まちづくり」が接近し、環境の持続可能性とともに強く認識され、その後、活発な研究分野になった。

同じ方向性をもつ「両国観光まちづくりグランドデザイン」(以下GD)は2012年から10年間の計画で進められた。委員長を務めた大下茂の論文(大下[2007])には観光まちづくりの最終目標は「市民が主役となり「まちぐるみ」で自らが地域を経営すること」という経験的所感が示されている。両国での取り組みも同様の住民主役につなげようとする姿勢がうかがわれる。

GDのコンセプトは「両国開花宣言 ～粋に暮らし、粋に愉しむまち両国～」である。「粋」をキーワードとするこの地域の性格付けが意図されている⁸。観光まちづくりの方法として、観光資源の「発掘」「磨き上げ」「編集」「発信」までの段階が示してある。

GDには横網町公園も含まれている。計画策定の際の区民シンポジウムでの参加者アンケート(回収数64件・複数回答可)の「区民が考える両国観光の柱」では5位に「鎮魂と復興」(20票)が⁹、また、「区民が考える両国観光の魅力」では8位に「東京都慰霊堂」(19票)があり¹⁰同公園への意識がうかがえる(GD本編8)。両国駅周辺が地図上A、B、C、Dの4エリアに分割されており、Aに属す同公園に関し、「東京都慰霊堂で改めて震災と戦災に向き合う」と記されている(GD実現に向けた計画・本編pp.10-11)。

GDでは観光まちづくりにおける行政と諸組織とひとりひとり(≒区民)の10年間での役割の転換が描かれている。すなわち、当初は先導役が行政、追従役が区民だが、10年間でこれが逆の立場になる計画だった¹¹。この間諸組織は中間的役割を維持する。

GDの住民活動面での成果は、両国協力会、という見解がある(墨田区観光課[2024.05.27])。任意団体の同会は江戸東京博物館勤務の東京都派遣職員が事務局を務め、GD計画前から今まで約20年の活動実績がある。活動はにぎわい創出に向けられており、回向院等を会場に、町会・商店会主催で、水上バス、ホテル等の事業者、日本相撲協会の力士らとともに4・5月の連休期間に「両国にぎわい祭り」開催に協力してきた。

結論的には、現在の横網町公園と両国観光まちづくりの間に密接な関係はなく、協力会の活動に触発された同公園についての新たな編集・情報発信もない。横網町公園にかんする墨田区との協力関係では、墨田区観光協会が修学旅行の案内やイベントで接点を持つだけである¹²。

この距離感の主な原因は、同公園の慰霊・伝承目的とその場へのふさわしさを重視する管理

方針と、観光まちづくりの定義の「活力あふれる」、および両国観光まちづくりの「粋」、さらには両国協力会の「にぎわい創出」といった方針との間の不親和性と考えられる。

4 東京都復興記念館の新アニメ動画「閻魔裁判鯰髭拔」

復興記念館では関東大震災100年に合わせたりニューアルを行った。同記念館のうち復興部分の展示を拡充した(慰霊協会[2024.05.27])とのことだが、一般訪問者の目では、新コンテンツの目玉は子供向けの歌舞伎作品の巖谷小波(いわやさざなみ)原作「閻魔裁判鯰髭拔(えんまさばきなまずのひげぬき)」のアニメ動画(31分11秒)である¹³。これは、同館の発信する伝承に従来と異なる方向付けを与えたものと言える。

慰霊協会の研究員が行った館の財産として存在していたこの作品のアニメーション化では、著名漫画家のしりあがり寿氏がキャラクターデザインを担当し、ユーモラスな子供向け娯楽作品となっている¹⁴。動画再生時、明るい音楽と声が館1階に響いていた。

その概略は次のようなものである。

関東大震災の多数の犠牲者が三途の川を渡ったために渡し賃で地獄がうるおい、閻魔は起震功労者の鯰を地獄での宴に招待した。鯰がその破壊力を誇張したほらを吹く。さらに宴席で鯰は竜宮の乙姫との接近を図るが浦島太郎と俵藤太秀郷らに阻まれ、ほらは暴かれる。鯰はとらえられ閻魔の裁判で髭を抜かれる罰を受ける。

従来、悲惨な震災の姿を展示して伝承してきた復興記念館の1階に数名が同時視聴できるスペースを取り娯楽作品上映を始めた点は同館の伝承の新機軸と言える。

震災関連の娯楽作品という点に違和感を持つ向きもあると考えられるが、筆者はこれを自然な変化と受け止めている。今日の楽しみのための伝統行事が悲惨な出来事を起源とすることはよくある。その変容の一因は、楽しみで人が集まるのが伝承継続に必要なからである。施設の場合、利用が少なければ存続価値が疑われる。コンテンツの選択は難しいが、被災直後の制作・上演実績のある作品ならば、現在の視聴者も過去の世情を映す材料として受け入れに抵抗が少ない。こうして許容される新展示が、伝承の印象を変えることも避け難い。

同作中、一点、今日の一般的視聴者が受け入れ難いのは、作品序盤の震災後の状況説明の、関東大震災での死者がすべて地獄に落ちた、というくだりである。これを遺族や縁者が視聴する際に不快感を持つ可能性はある¹⁵。慰霊協会[2024.05.27]の解釈は、この部分は震災を墮落した人間の文化への戒めとみる当時の「天譴(てんけん)」思想に基づいている¹⁶。現在の一般的視聴者が抱く違和感は、災害の受け止め方の時代と世情による変化の反映である。

復興記念館リニューアルはもっぱら協会主体であり、GD等の住民の意見が取り入れられたわけではない(慰霊協会[2024.05.27])。先述の通りGDには横網町公園の記載があるが、東京都建設局・墨田区観光課・都市計画課・墨田区観光協会・両国協力会への調査では、墨田区各組織の活動の慰霊堂・記念館の展示・伝承への影響はない[2024.05.27;06.25]。

展示作成を担当した慰霊協会と墨田区住民の活動の間には密接な関係は認められない。

まとめ

関東大震災の主要被災地にある横網町公園は、現在、災害時の避難先という防災上の役割を担うため、震災の中心的被災地という歴史的事実と一般的訪問者への伝承との間に連続性は見出しにくく、現在の具体的な教訓の内容は明確ではない。

主要2施設の内、訪問者数の記録からすると、慰霊堂に比べ復興記念館は訪問者が少なく、期待されている伝承力が乏しい。展示内容が伝える伝承は、「紙芝居『関東大震災』」のように、時代の世情による脚色がなされているものがある。今後、伝承の内容明確化と館の伝承力維持が課題である。

墨田区の住民や事業者により進められてきた両国観光まちづくりGDはこれまでにぎわい創出の方向性を持って活動してきており、横網町公園は主な活動対象ではない。東京都・慰霊協会と両国観光まちづくりの関係諸組織の活動方針との間に親和性がないためと考えられる。

関東大震災から100年を機に制作された復興記念館の子供向けアニメ「閻魔裁判鯨髯拔」には娯楽の要素が加味されたが、それは自然なことと考えられる。また、同作に見られる、被災者が全員地獄に落ちた、という天譴思想的表現は現在の視聴者に違和感を与えるが、世情を表す資料作品として受け入れ可能と考えられる。伝承の印象変化も進行中である。

このアニメを含め復興記念館の展示に両国観光まちづくりが関わった形跡はない。観光まちづくりと同館は接近してはこなかった。

以上により、必要とされる災害の伝承は時代とともに変化することと、伝承と観光まちづくりとの接近は自動的帰結ではないことを確認することができる。

1 災害の「伝承」は今日好まれる表現だが、本稿執筆時、復興記念館収蔵品データベースでの「伝承」の検索結果は0件のため、同館で昔から使用されてきた言葉ではないと推察できる。「災害の教訓を社会に伝える」という意味の類似表現としては、「社会教化」が震災記念堂の設立（現在の慰霊堂・昭和5年）時の3目標「慰霊・防災・社会教化」の一つに数えられている。（2024.06.23 参照）<https://tokyoireikyokai.com/data/92> 筆者は「伝承」と「社会教化」は社会の中の水平的伝達と垂直的伝達の差と考えている。

2 消防庁消防大学校消防研究センターサイト「旋風の発生条件や発生メカニズムはいまだ解明されておらず、その対策も全くとられていないのが現状」のため、それを避けるための防災上の教訓を住民に伝承することは難しい。（2024.06.06 参照）https://nrfd.fdma.go.jp/research/seika/kamitsu_toshi/senpu/index.html

3 太平洋戦争に関しても、非戦闘員の住民が多く犠牲になった東京大空襲について、ここを訪れる一般の人々が伝承すべき教えが何なのかは伝わってこない。

4 年間利用者数推計に令和2年度からの新型コロナ禍による大幅減少は見られない。

5 令和元年度末から翌年度には新型コロナ禍による入館者・入堂者数減があった。

6 一般的伝承としては、火災に強いまちづくりの平常からの心掛け、という程度となる。

7 復興記念館収蔵品データベース「紙芝居『関東大震災』」（2024.06.27 参照）<https://tokyoireikyokai.com/data/461>

8 他に「技」「心」があげられている。また、墨田区の特徴はものづくりであり、水辺を特徴とする、とされている。

9 1位相撲（38票）、2位葛飾北斎、3位両国川開き、4位ものづくり、6位その他。

10 1位江戸東京博物館（41票）、2位国技館、3位すみだ北斎美術館、4位回向院、5位吉良邸跡、6位相撲部屋、7位旧安田庭園、9位隅田川テラス、10位小さな博物館工房ショップ、11位その他、12位特になし。

11 計画作成から12年後の調査では「区民の自主性が高く、当初から区民主体だったのでは」という行政の見解も聞かれた。墨田区都市計画課[2024.05.27]。

東京都慰霊堂・復興記念館の伝承と観光まちづくりの現状

- 12 調査結果概要は次の通り。東京都建設局公園緑地部公園課 [2024.06.25] 「横網町公園での墨田区との協働事業活動の実績はない。」；慰霊協会 [2024.05.27] 「墨田区民との接点はない。」；両国協力会 [2024.06.04] 「横網町公園対象の活動を行ってはいない」。
- 13 この作品に基づく舞台は関東大震災の1年後1924年に日比谷公園で上演された。
- 14 慰霊協会に対し令和5年度第44回巖谷小波文芸賞特別賞が贈られている。
- 15 原作にも鯨と大王との会話で犠牲者がすべて地獄に行ったという表現があり、アニメはこれを踏襲したものである。巖谷 [1933] pp.415-416
- 16 慰霊協会 [2024.05.27]

【参考文献】

巖谷小波（木村定次郎編）[1933]『小波お伽全集 第5巻（児童劇集）』pp.409-440, 「12 閻魔裁判鯨髯拔」
大下茂 [2007] 「市民がまちづくりを牽引する時代を迎えて 観光まちづくりの現場での模索と運営からみたまちづくりプランナーに求められる技量」『都市計画』268
墨田区『両国観光まちづくりグランドデザイン』2015年10月5日（2024.06.05 参照）
https://www.city.sumida.lg.jp/matizukuri/matizukuri_suisin/kyoudou_matizukuri/20130724.html
墨田区 [2015]『両国観光まちづくりグランドデザイン』概要版／本編 10月5日
墨田区 [2015]『両国観光まちづくりグランドデザインの実現に向けた取り組み』概要版／本編
十代田朗編著 [2010]『観光まちづくりのマーケティング』学芸出版社
東京都慰霊協会 [2023]『東京都復興記念館 戦災コーナー展示パネル』
東京都建設局 [2022]『横網町公園マネジメントプラン 横網町公園の管理運営、整備等の取組方針』
西村幸夫編著 [2009]『観光まちづくり まち自慢からはじまる地域マネジメント』学芸出版社
森田祐介編 [2021]『復興記念館開館90周年記念令和3年秋季特別展 復興記念館～その軌跡をたどる～』東京都慰霊協会

【情報提供】

墨田区観光課 [2024.05.27]
墨田区都市計画課 [2024.05.27]
墨田区観光協会 [2024.05.27]
東京都慰霊協会 [2024.03.13; 2024.05.27]
東京都建設局公園緑地部公園課 [2024.06.25]
両国協力会 [2024.06.04]

謝辞

本稿は日本学術振興会科研費補助金「災害伝承施設の評価とその施設が観光まちづくりに果たす役割」（庄子真岐代表、基盤研究C、2023-2025, 23K11629）の成果の一部である。記して謝す。